

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	立 田 瑞 穂												
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当														
<p>論 文 題 目</p> <p>FACTORS INFLUENCING THE QUALITY OF LIFE OF PEOPLE WITH INTELLECTUAL DISABILITIES IN DENMARK AND JAPAN: FROM THE PERSPECTIVE ON PERSONAL AND ENVIRONMENTAL CHARACTERISTICS</p>															
<p>論文審査担当者</p> <table border="0"> <tr> <td>主 査</td> <td>教 授</td> <td>川 合 紀 宗</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>若 松 昭 彦</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>七 木 田 敦</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>准教授</td> <td>竹 林 地 毅</td> </tr> </table>				主 査	教 授	川 合 紀 宗	審査委員	教 授	若 松 昭 彦	審査委員	教 授	七 木 田 敦	審査委員	准教授	竹 林 地 毅
主 査	教 授	川 合 紀 宗													
審査委員	教 授	若 松 昭 彦													
審査委員	教 授	七 木 田 敦													
審査委員	准教授	竹 林 地 毅													
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本研究の目的は、Schalock et al. (2002) の Quality of Life (QOL) 8領域モデルを理論的視座とし、デンマークと日本の知的障害者の QOL の現状について、知的障害者本人、スタッフに対して調査用紙及びインタビューによる調査を行うことにより明らかにすること、QOL に影響を与える要因について、特に個人と環境の相互作用に着目し、デンマークと日本それぞれの特徴を明らかにすること、デンマークのスタッフの実践が知的障害者の QOL に与える影響についてのメカニズムを明らかにすることであった。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。第 I 部では、知的障害者の QOL に関する理論的枠組み及びその課題について整理した。第 1 章では、知的障害者の QOL に関する背景を明らかにするため、QOL 先進国であるデンマークと我が国の QOL 文献考察を通じて、問題の共通点と相違点を明示した。第 2 章では、知的障害者の QOL の概念、測定、応用に関する研究を整理することで、本研究の目的を明らかにするための理論的視座を提示した。</p> <p>第 II 部では、デンマークと日本の知的障害者の QOL 評価の調査結果を提示し、各国の知的障害者の QOL について、8 領域モデルの適用の可能性を検討した。第 3 章では、デンマークと日本の知的障害者の QOL を理解するための基盤となる各国の支援制度、社会サービスの現状について整理した。第 4 章では、尺度を用いて QOL を評価し、その尺度の信頼性妥当性の検証及びデンマークの知的障害者の QOL を構成する要素について検討した。その結果、自己報告版は 2 因子構造 8 項目（ソーシャルネットワーク、物質的幸福）、他者評価版は 3 因子構造 12 項目（身体的幸福、情緒的幸福、物質的幸福）が確認された。物質的幸福は自己報告、他者評価に共通した領域として確認されたが、得られた項目は異なった。自己報告版では、生産性に関連する項目が得られ、他者評価版では、経済状況や選択の機会に関連した項目が得られた。</p> <p>第 III 部では、デンマークと日本の知的障害者の QOL に影響を与える個人因子、環境因子について検討した。まず第 6 章では、デンマークの知的障害者の QOL に影響を与える個人因子（知的障害の程度）、環境因子（日中の活動形態、居住形態）との関連を検討した。自己報告では、知的障害の程度、日中の活動形態、居住形態ともに QOL 領域への影響が示された。知的障害の程度の影響について、重度/中度群の人は軽度・ボーダーライン群の</p>															

人より情緒的&身体的幸福の得点が高く、自己決定の得点は低かった。他者評価でも、自己報告と同様に、知的障害の程度、日中の活動形態、居住形態ともに QOL に影響を与えた。全体的に、軽度/ボーダーライン群の人は重度/中度群の人に比べて得点が高くなる傾向が示されたが、重度/中度群同士の比較では、デイセンターより、学校や福祉的就労に所属する場合に得点が高くなった。第7章では、日本の知的障害者の QOL に影響を与える個人因子、環境因子との関連を検討した。自己報告では知的障害の程度、日中の活動形態、居住形態いずれも影響は認められなかった。他者評価では、知的障害の程度の影響について、重度の人は、身体的幸福、物質的幸福の2領域で、軽度群よりも得点が高かった。また、就労継続支援 B 型、または家族同居の対象者同士の比較では、重度群は軽度群よりも物質的幸福の得点が高かった。第8章では、デンマークの日中の活動の場における知的障害者の QOL とスタッフの支援の関連について、エスノグラフィーによる調査を通して検討した。結果、デイセンター、就労の場ともに、活動や仕事への参加は、個人の成長や情緒的幸福など QOL を高める機会となっていた。

最後に第 IV 部では、第9章として、第 I～III 部の総合考察を行った

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. QOL の構成要素について、デンマークと日本の知的障害者と支援者は、本人の QOL に関して、異なる領域を重視することが示唆された点である。デンマーク、日本ともに、他者とのつながりや well-being に関する領域は、本人の QOL を構成していたが、デンマークの知的障害者の場合には、自立生活における自己決定が重要な領域であり、日本の場合には、有給の仕事やその機会を含む物質的幸福が重要な領域であった。

2. QOL の影響因子について、デンマークと日本とでは異なることが明らかになった点である。デンマークの知的障害者は重度・中度の人のほうが、軽度の人に比べて、情緒的・身体的幸福が高かった。また、日本のスタッフは、重度の人の方が、中度・軽度の人に比べ、身体的幸福、物質的幸福がよい状態にあると認識していた。日本の場合には、家族同居をしている対象者が多く、福祉的就労に従事している人も多かった。家族の支援があり、仕事があるという状況が本人の健康や生活の安定につながっていたと考えられる。デンマークの知的障害者は、一人暮らしなど、自立的な住環境に暮らす人は、24 時間職員常駐型の集合住宅に暮らす人に比べ、自己決定の力がある、またはその機会が多いことが示された。デンマークの重度・中度知的障害者は、デイセンターより、学校や福祉的就労の場に所属する人の方が、個人の成長の機会が多いことが示された。

3. QOL を高めるスタッフの支援について、デイセンター、福祉的就労の場ともに、活動や仕事を提供することで QOL を高める点は共通していたが、各 QOL 領域へのアプローチの仕方は対象者や場の違いに応じて異なることが明らかになった点である。現在の QOL モデルでは、ソーシャルインクルージョンは障害のない人との交流や活動の機会を重視しているが、スタッフは友人や仲間関係を築くことが、個々の QOL や自立生活にとって重要であるとみなし、知的障害者のコミュニティを活用していたことが明らかになった。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成30年 2月 8日